日本大学

大学史ニュース

第15号　2018年9月30日　発行

目　次

調査報告
◇元老院議官鶴田皓の生誕地を訪ねて…… 2
◇戦没詩人・竹内浩三の資料調査…… 4
◇日本法律学校創立期の佐賀県出身講師たち…… 6

所蔵資料紹介
◇大学予備門時代の樋山資之書簡…… 3
◇日本大学第６代総長鈴木勝の書簡…… 5

機上の遠藤益司海軍少尉

遠藤益司（年代不詳：日大時代）

特攻隊員の遺品が眠る海上自衛隊教育参考館

広島県江田島市の海上自衛隊第一術科学校にある教育参考館は、昭和11（1936）年、当時の海軍兵学校に「海軍の歴史と伝統保存、自己修養と学術研鑽の資とすること」を目的として、建てられました。戦後は閉鎖されましたが、海上自衛隊創設後の昭和35年に復活し、館内には日本海軍に関する歴史資料が展示されています。また、海軍軍人を志していた近江一郎氏が、昭和21～26年にかけて特攻隊戦没者の遺族を訪ねて収集した、約1,800通の遺書などが保管されています。近江氏は、遺品を厚生省に寄贈。その後、防衛庁（現 防衛省）に移管されて、教育参考館に収められています。

当課では、6月13日に、同館が所蔵する日本大学出身の特攻戦没者を対象として、海軍飛行専修予備学生16名（13期生9名・14期生7名）の遺品を調査しました。ここに掲載したのは、13期生遠藤益司海軍少尉（戦死後、大尉）の遺影2点です。遠藤少尉は、昭和20年4月6日、鹿屋基地から沖縄の輸送船団に特攻（第一神剣隊）、戦死しました。調査の詳細は、後日、紹介する予定です。

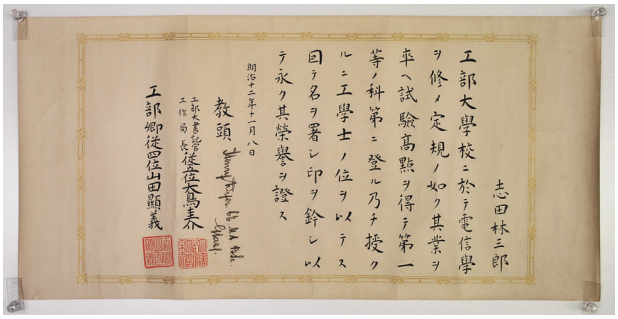
教育参考館　正面

元老院議官鶴田皓の生誕地を訪ねて

平成30年3月17日、明治初期の法制官僚で山田顕義らと共に各種法律の編纂に参画した、鶴田皓（あきら）の生誕地佐賀県多久市を訪ねました。江戸時代、多久は佐賀藩の諸役家老を務める多久氏の邑（領地）で、鶴田家は、領内の子弟に儒学を教える邑校「東原庠舎（とうげんしょうしゃ）」の教諭を多く輩出しています。

多久市先覚者資料館展示室の
鶴田皓のコーナー

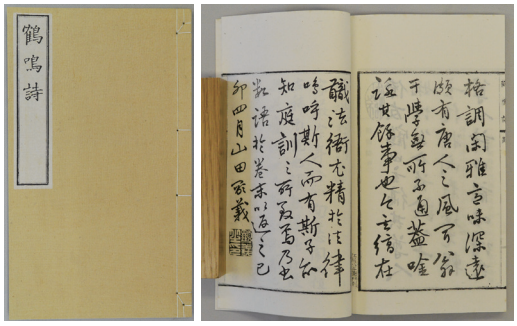
皓は、東原庠舎教諭で多久家の近習監・侍講鶴田斌（ひとし）の長男として、天保6（1835）年12月に生まれました。江戸に遊学した後、21歳で東原庠舎の教諭となります。教え子には、工部大学校電信科第1期生で工学博士第1号（5人中の1人）となる志田林三郎もいました。戊辰戦争に出陣し、多久兵で構成された佐賀藩4番小隊の第2分隊長として会津攻めに加わりました。戦争後は、幕府の昌平坂学問所を引き継いだ昌平学校の教授試補となり、漢学を教えましたが、僅か6ヶ月で刑部省の刑法官に任ぜられ、以降、刑部省や改組した司法省で法律の調査・編纂に当たることとなります。明治5（1872）～6年には、司法省欧州派遣団の一員に選ばれ、ヨーロッパ各国で法律・司法制度を調査しました。



「工部卿山田顕義」の署名がある工部大学校卒業証書
（多久市先覚者資料館所蔵）

明治7年7月、山田顕義が司法大輔に就任した際には明法権頭として、法学校開講の準備などにかかわっていました。明法寮と後身の司法省法学校では、フランスから招いたボアソナードとブスケが司法省官吏に対する講義も行い、皓は9年1月に司法大丞兼太政官一等法制官に昇進した後も、熱心に受講しました。この頃から、刑法・民法・商法など各種法律の審議・編纂に携わるかたわら、東京開成学校や後身の東京大学法学部では講師として「日本現行法律」を担当しました。

明治13年2月検事局長、3月には元老院議官兼任を命ぜられました。14年10月、参事院議官・同司法部長、15年3月から2年余山田の推薦で商法編纂委員長を務めました。18年12月の内閣制度発足による政府組織の改組で参事院は廃止されて、元老院議官に再任。19年3月、勅任官一等（宮内次官・陸海軍中将などと同）*に叙せられ、官吏としての地位を極めました。20年10月、司法大臣の山田が法律取調委員長となると委員に任命されます。週2回の審議は深夜に及ぶこともあり、その心労がたたってか、21年4月に没しました。



『鶴鳴詩』　「山田顕義」の奥書
（多久市先覚者資料館所蔵）

多久市先覚者資料館では、展示室2に「東原庠舎」とその出身者で名を成した、鶴田皓・高取伊好（これよし）（皓の末弟、工部省に勤め後に石炭王と呼ばれる）・志田林三郎に関する展示品がならんでいます。志田のコーナーには、明治12年11月8日付の工部大学校の卒業証書が展示され、「工部卿山田顕義」の署名があります。文字は代筆ですが、就任期間が5ヵ月半と短かった工部卿と

斗南鶴田君碑

肩書のある山田の資料は希少です。皓に関する同館所蔵資料には、巻子にした遺墨3巻（横尾家資料）と和装本の『鶴鳴詩』があります。後者は、父斌の傘寿記念に編纂・刊行した、斌と叔父西鼓岳・澤井梅野の兄弟三人の漢詩集で、序には有栖川宮熾仁親王（陸軍大将）・前島密（逓信次官、近代郵便制度を整備）・阪谷朗盧（東京学士院会員、儒学者）・川村雨谷（大審院判事、南画家）の4名が、奥書は山田と皓自身が寄せています。

先覚者資料館からほど近い「多久八幡神社」の境内には、山田題字の「斗南鶴田君碑」**が建っています。この顕彰碑は、皓が没して2年後の明治23年4月、谷中（東京都台東区）の鶴田家の墓地内の顕彰碑「元老院議官正三位勲二等鶴田君碑」（題字は山田）と同時期に建てられました。

*親任官（内閣総理大臣・陸海軍大将など）に次ぐ二番目の官等。

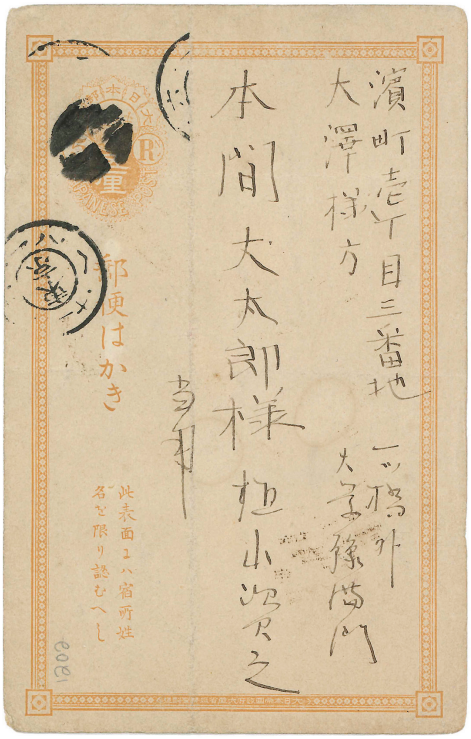
**斗南は、皓の号。

（髙橋）

【参考文献】鶴田徹『元老院議官　鶴田　皓―日本近代法典編纂の軌跡―』
（鶴鳴社、平成11年5月刊）

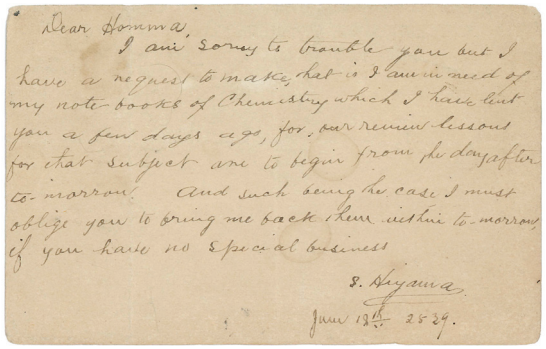
大学予備門時代の樋山資之書簡

平成30年4月、酒井俊昭氏より大学予備門時代の樋山資之のはがきが寄贈されました。この葉書は同じく大学予備門に通う本間丈太郎という人物に宛てられたもので、本文は英文で記されています。樋山が貸した化学の講義ノートを返却して欲しいという内容です。



樋山資之は安政6年（1859）群馬県館林に生まれ、明治12年に大学予備門を卒業し、明治16年に東京大学法学部を卒業しました。明治17年からドイツに留学し、同地で宮崎道三郎や穂積八束らと交流していますが、この頃、日本法律学校設立の構想が練られたと考えられています。

創立期には宮崎とともに幹事を務めた樋山は、他の創立者よりも深く日本法律学校創立に関与しました。しかし、樋山に関する資料はこれまであまり確認されていませんので、今回の資料は樋山資之の学生期の動向を示す貴重な資料といえます。また、本文が英文で記されているあたりも、当時の大学予備門に通う学生の気質が垣間見え興味深い資料といえます。ご寄贈いただきました酒井氏にあらためて御礼申し上げます。　（松原）


Dear Homma,
I am sorry to trouble you but I have a request to make, that is I am in need of my note-books of Chemistry which I have lent you a few days ago, for our review lessons for that subject are to begin from the day after to-morrow. And such being the case I must oblige you to bring me back them within to-morrow if you have no special business.
S. Hayama
June 18th 2529.

戦没詩人・竹内浩三の資料調査

日大時代の竹内（右）

日本大学出身の学徒兵調査の一環として、「骨のうたう」「日本が見えない」の詩、『筑波日記』などで著名な戦没詩人・竹内浩三について、今年3月に本居宣長記念館（三重県松阪市）の収蔵資料を調査しました。

竹内は、大正10（1921）年5月に三重県宇治山田市（現伊勢市）の呉服商の家に生まれました。昭和14（1939）年3月宇治山田中学校を卒業し、翌15年4月日本大学専門部芸術科（映画科）に入学、17年9月に繰り上げ卒業しました。同年10月三重県久居町の中部第38部隊に入営し、18年9月茨城県西筑波飛行場に新設された挺進滑空部隊（通称東部116部隊）に転属しました。そこで厳しい夜襲訓練を受け、19年12月にフィリピンの戦場に送られ、20年4月ルソン島バギオにおいて戦死しました。23歳という若さでした。

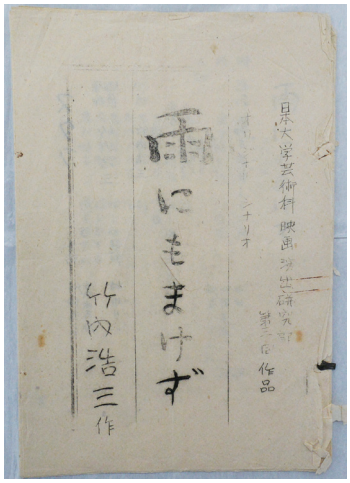
幼い頃から母親に連れられて、映画を観に行くことが多かった竹内は、郷土の生んだ映画監督で、中学校の先輩でもあった小津安二郎に憧れ、映画人を志し、当時日本で唯一映画科のあった日大に入学しました。日大時代は、毎日のように喫茶店、映画館、古本屋に通い、「学生狩り」（学生風俗の取締り）に遭ったこともありました。この時期に詩・小説・シナリオ・随筆などを多く執筆し、昭和17年には、宇治山田中学校の仲間とともに『伊勢文学』（文芸同人誌）を発行しています。いつ頃からかは不明ですが、映画監督の伊丹万作と文通も行っています。

竹内の遺稿は、実姉松島こう氏によって長く大切に保存されてきました。その作品が初めて世の中に紹介されたのは、昭和31（1956）年に中井利亮（『伊勢文学』の同人）が、松島氏から遺稿集を作って欲しいという依頼を受け、『愚の旗―竹内浩三作品集』（私家版）を出版した時でした。昭和41年には、松阪市が編集した戦没兵士の手紙集『ふるさとの風や』（三一書房）にも掲載され、この本の題名は、竹内の詩から選ばれています。この頃から、しだいに人々から注目を集めるようになり、マスコミに取り上げられる機会も多くなりました。昭和55（1980）年には、松島氏らにより「戦死ヤアハレ」（「骨のうたう」最後の一節）の詩碑が、伊勢市朝熊（あさま）山上に建立されました（『黌誌』第3号口絵にて紹介）。

現在、遺品・遺稿類は、松島氏から松阪市に寄贈され、前述したように本居宣長記念館が収蔵し、同館により詳細な目録が作成されています（『新規寄贈品目録第4集　竹内浩三関係資料』）。この目録の中心は松島氏寄贈資料ですが、そのほか関係者からの寄贈資料も含まれています（総数474点）。

日大時代に関する資料は、「手紙」、「小遣帳」、「雨にもまけず」（日本大学芸術科映画演出研究部第3回作品）、「教科書」、「購入書籍」などがあります。特に松島氏宛の手紙には、東京での生活の様子が記されています。昭和16年の「小遣帳」は、4月下旬から5月上旬、11月下旬から12月上旬まで計2ヵ月余とわずかですが、手紙と合わせると生活の様子を窺うことができます。

「写真帳」には、そう多くはありませんが日大時代のものがあり、杵島（きじま）隆、瀬川正雄ら同級生の写真も含まれています。杵島は、東宝の委託学生として映画科に入学し、戦後著名な写真家となりました。瀬川は、大映東京撮影所の助監督として、『大怪獣決闘・ガメラ対バルコン』をはじめ、大映のドル箱といわれた『ガメラ』シリーズなどを撮影しています（寺島正芳氏のご教示による）。



シナリオ「雨にもまけず」

「雨にもまけず」の題名は、一番好きだった詩人宮沢賢治の最も好きな詩から選んでいます。撮影は、17年6月末に信越線牟礼（むれ）駅（長野県上水内（かみみのち）郡飯綱町）で、同級生の協力のもと、演劇科の学生が参加して行われました。竹内は、教科

書や愛読書の余白にも詩文を書いていますが、「日本が見えない」「よく生きてきたと思ふ」の詩は、大学のドイツ語のテキストと思われる『ハイゼ傑作抄』に書き留めていました。

本居宣長記念館の「竹内浩三関係資料」は、「戦争の時代」に煩悶（はんもん）しながらも、自ら「芸術の子」と称し、創作活動に生きる意味を求め続けた竹内が、どのような学生時代を過ごし、いかに軍隊・戦争と向き合ったかを現在に伝えています。

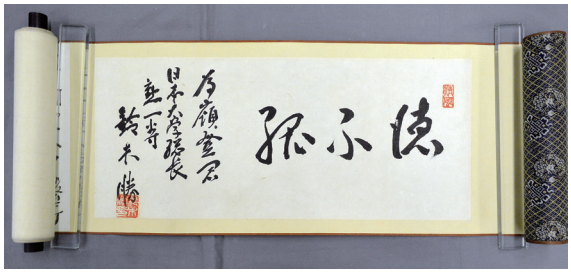
出征前日の竹内、姉こうさんとその子供たちと撮影

ところで、竹内の作品は小林察編『日本が見えない 竹内浩三全作品集 全1巻』（藤原書店）、同『恋人の眼や ひょんと消ゆるや』（新評論）などに収録され、多くの人によって関連著作も刊行され、日大時代についてもかなり明らかになってきています。最近の研究としては、永澄憲史氏が『京都新聞』（夕刊）に連載された「つらい時代を生きて 和生さんと浩三さんの京都」（2016年10月から2018年6月まで月1回）があります。小稿は、これらの調査・研究を参考にさせていただきました。なお、ここに掲載した写真は、いずれも本居宣長記念館の所蔵のものです。

（小松）

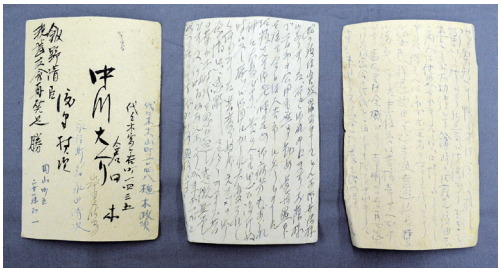
日本大学第６代総長鈴木勝の書簡

このたび、福岡市在住の嶺博之氏より、日本大学第6代総長鈴木勝関係資料が寄贈されました。資料は、「鈴木勝先生寿像除幕記念　昭和四十九年」という外題が記されている巻子1点と鈴木総長のはがき3点です。嶺博之氏の尊父である嶺登氏は本学歯学部の卒業生で、寄贈資料からは鈴木総長と親密な間柄であったことがうかがえます。



「鈴木勝先生寿像除幕記念」という巻子には、「徳不孤」（徳は孤ならず）という書と、嶺登氏宛ての鈴木勝書簡が含まれています。外題の「寿像除幕記念」とは、日本大学松戸歯科大学（現・松戸歯学部）に建立された銅像を指しています。

興味深いのは3点のはがきで、消印から昭和23年頃のものであることがわかります。1月24日消印のはがきには、嶺登氏から久しぶりに連絡を受けた鈴木勝が、年始の挨拶と同窓生の復員状況について説明し、「生きて来た事が大功績です」と記しています。嶺氏と鈴木は、ともに昭和14年に結成された日大渋谷歯友会の一員で、この会は渋谷区在住の日本大学歯科卒業生がメンバーでした。戦況の悪化により活動を休止していましたが、このはがきの翌25日、渋谷歯友会が再発足し、福岡に住む嶺氏に宛てて皆で寄せ書きをしたはがきも残されていました。もう1点は、昭和23年7月、歯学部創設者佐藤運雄とともに九州を訪れた鈴木が、嶺氏の歓待を受けたことに対する礼状です。



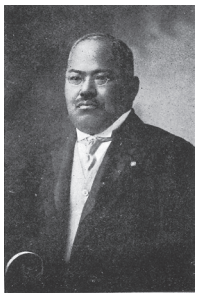
昭和20年代前半の本学関係資料は少なく、今回寄贈された資料は、当時の歯学部関係者の動向を伝える貴重な資料といえます。

（松原）

日本法律学校創立期の佐賀県出身講師たち

「大学史編纂課だより」第8号に、日本法律学校創立者の一人で佐賀県出身の長森（野田）藤吉郎について、現地での調査報告を書きましたが、法律取調委員として委員長の山田顕義司法大臣を補佐した元老院議官鶴田皓も佐賀県の出身です。今回、鶴田皓の現地調査に関連して、佐賀県立図書館郷土資料室で、佐賀県出身の日本法律学校講師などについて調べてみました。

『佐賀県教育史』第2巻に、明治12年（1879）に佐賀郷友青年会が結成されたとき、長森と、日本法律学校開校後民法担当の講師となる水町袈裟六、刑事訴訟法の講師である柿原武熊（判事試補・麹町区治安裁判所詰）が郷友青年会のメンバーにいました。



柿原武熊

西久保弘道

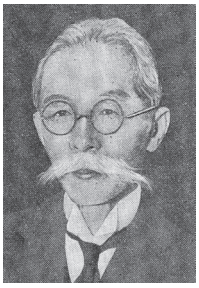
佐賀新聞社から刊行された『佐賀スポーツ人国記』に「無刀流の達人―西久保弘道」と題され、剣道家でありながら警視総監や第11代東京市長を歴任し、貴族院議員にも勅撰された西久保弘道という人物の逸話が載っています。文久3年（1863）佐賀市鍋島町に生まれた西久保は、司法省法学校予科に学びますが、夏休みなどは水町袈裟六・古賀廉造（検事・東京始審裁判所詰）・中村純九郎らと勉強したといい、東京大学法学部に入学後の同級生には城数馬・横田秀雄・太田峰三郎の名前が挙げられ、勉強仲間は木下友三郎・柿原武熊・織田万（よろず）・長森藤吉郎であったといいます。長森・水町・古賀・柿原・織田など同郷佐賀出身のほか、横田秀雄・太田峰三郎・木下友三郎も日本法律学校創立期の講師になった人物たちです。

また、「明治佐賀人の鳥瞰と人材輩出の縁由を探る」（『東京と佐賀』昭和36年）と題した佐賀県重鎮諸氏の座談会では、織田万は水町袈裟六と親友だったと話題になっています。

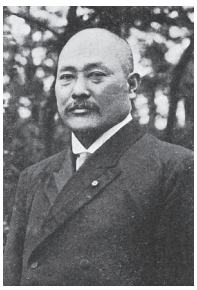
次に、旧佐賀藩出身者で結成された「知新会」という、親睦の会がありました。この知新会の明治16年度の入会者には、富岡敬明・大木喬任・鶴田皓・大隈重信・志田林三郎・高木秀臣・木下周一・副島種臣が挙げられ、明治26年の評議員には古賀廉造と水町袈裟六の名前が見えます。明治政府の官僚として知られる人物たちばかりですが、高木秀臣（司法省東京控訴院検事長）は日本法律学校創立時の評議員の一人、木下周一（内閣法制局参事官・法律取調報告委員）も創立時講師の一人です（『佐賀藩海軍史』）。

木下は、明治4年（1871）佐賀藩選抜で上京し独法科に学び、6年、政府海外留学生としてドイツで法学・行政学を修めました（ライプツィヒ大学最初の日本人留学生）が、同行の留学生に、文部・陸軍両省留学生として曾禰荒助（内閣法制局参事官兼記録局長）と平田東助がいました。木下は帰朝後陸軍大尉に任官（司法省11等出仕）、のち文官に転身し法制局に勤務。山形県知事や岡山県知事を歴任しました。

この木下で思い出した記事があります。日本法律学校の初代校長を務めた金子堅太郎が回顧のなかで、明治17年（1884）に乗馬飼養令というものが出され、士官学校の教官を呼んで本式の乗馬稽古をはじめたが、その仲間には曾禰荒助・岩崎小二郎・村田保・水野遵（法制局書記官）・木下周一ら各省の役人がいたと述べています（「七十四歳で二哩の競泳」『優性運動』第1巻　大正15年刊）。ここにも、日本法律学校の講師となる曾禰・水野遵・木下や評議員の村田保が登場しています。



水町袈裟六



古賀廉造

今回の調査で、初めて佐賀県出身と分かった講師や評議員もおり、司法省法学校や東京大学で共に学んだ仲間のなかから、日本法律学校に係る人物が出てきた。日本法律学校を設立するにあたり、講師陣や評議員をどう揃えていったのか、その経緯の一端が見えてきそうです。

日本法律学校の評議員・講師名には当時の在職名をカッコで書き入れました。（田渕）

全国大学史資料協議会東日本部会創立30周年記念シンポジウム

5月31日、國學院大學において全国大学史資料協議会東日本部会総会が行われ、総会後に東日本部会創立30周年記念シンポジウムが開催されました。最初に国立歴史民俗博物館荒川章二名誉教授による「大学史と学生生活・活動資料―個別大学史と学生史の間で―」というテーマの記念講演がありました。荒川氏は企画展「1968年―無数の問いの噴出の時代―」の企画立案の経験を踏まえ、学生資料の展示活用等について講演されました。

その後、荒川氏の他にパネリスト5名を交えて「大学アーカイヴズの可能性」というテーマで記念シンポジウムを行いました。記念講演を踏まえて、学生生活資料をどのように収集・活用していくか、さらには協議会30年の活動と今後の方向性などについて議論されました。

全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国（神奈川）大会及び研修会

テーマは「公文書館法30年―
今、問われる公文書管理―」

第43回全国歴史資料保存利用機関連絡協議会（全史料協）全国大会が、平成29年11月9日（木）・10日（金）の両日、神奈川県相模原市「杜のホールはしもと」を会場に開催されました。大会初日の最初に組まれた資料保存施設の視察は、相模原市立公文書館の見学でしたが、一風変わった公文書館といえるでしょう。

相模原市は、平成26年に公文書管理条例を施行し市立の公文書館を設置しましたが、その施設に選ばれたのが、旧城山町の町議会議場を再利用するもので、資料の配架・収納など設備のための改装はしましたが、議員席や傍聴席はそのまま利用者席となり、講演会席にもなっています。

旧城山町議会議場を再利用した
相模原市立公文書館（相模原市緑区久保沢）

大学史に関する情報については下記までお寄せください

日本大学企画広報部広報課（大学史）　E-mail:nuhistory@nihon-u.ac.jp
TEL　04-2996-4555　FAX　04-2996-4592

活動報告

2017年 10 月～2018年 3 月
（大学史に関する活動）

○調査研究等

10月11日～13日	全国大学史資料協議会全国研究会（愛知大学）
11月 9 日～10日	全史料協全国大会（神奈川県相模原市）
11月21日	「1968年（無数の問いの噴出の時代）」企画展示の資料確認調査（国立歴史民俗博物館）
12月 1 日～ 2 日	日本法律学校創立者及び講師関係資料調査（長野県高森町・松本市）
12月 5 日～ 6 日	水泳部OB河野通廣氏・校友山本實彦関係資料調査（鹿児島県鹿児島市・薩摩川内市）
2018年	
3 月 2 日～ 4 日	学祖関係資料・史蹟調査（山口県山口市及び萩市・下関市）
3 月 8 日～ 9 日	創立者宮崎道三郎及び本学出征学徒竹内浩三関係資料調査（三重県）
3 月15日～17日	学祖及び創立期講師関係資料・史蹟調査（佐賀県佐賀市・多久市）

○展示

10月～12月	戦前期の日大スポーツ～碑文谷の合宿所・プールの完成～（日本大学会館2階）
2018年	
1 月 9 日～ 2 月28日	「神田学生街の記憶」展（ECOM駿河台）
1 月～ 3 月	「日本大学60周年記念式典・行事」（日本大学会館2階）

○講演・報告

11月 4 日	日本大学の自校史教育担当者養成実践シンポジウム（日本大学会館）
11月10日	法学部職員への学祖史蹟講習（護国寺等）
12月14日	高等学校・中学校等教員採用内定者オリエンテーション「付属高等学校等の歴史について」（日本大学会館）
2018年	
3 月 6 日	新規採用教職員研修学祖講演（日本大学会館）

日本大学大学史ニュース
第15号
2018年9月30日　発行
編集・発行　日本大学企画広報部広報課
〒359-0003　埼玉県所沢市中富南4-25
TEL 04-2996-4555　FAX 04-2996-4592
印　　刷　株式会社 アプライズ